

シャバット

—— その精神と今日的意味 ——

鵜丹谷 三千代

序

安息日を心に留め、これを聖別せよ。
六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、
七日目はあなたの神、主の安息日であるから、
いかなる仕事もしてはならない。
あなたも、息子も、娘も、
男女の奴隷も、
家畜も、
あなたの町の門の中に寄留する人々も同様
である。
六日の間に主は天と地と
海とそこにあるすべてのものを造り、
七日目に休まれたから、
主は安息日を祝福して
聖別されたのである。（出エジプト記20：
8-11）

第七日目は、聖書の中で唯一、名前を与えられている日である。ほかはどの週日も聖書では呼び名がない。1から6まで番号をつけているだけである。神は第七を取り分け、それだけ抜き出し、他のすべての週日と別扱いされ、聖別されている。

そもそも安息日を守る、それを七日毎に規定するということはイスラエルの古くからの人間が守った知恵である。イスラエルの民がカナンに定住を始める、あるいはそれ以前にまで十分に遡及すると考えられるほど古い伝承である。シナイ契約、十戒に収められている。この七日毎の安息は、同時代近隣の諸文化のなかに見いだすことのできない特徴的なことである。バビロニア、アツシリアにも、七という数の由来を見いだすことはできない。そこではむしろ十、十二といった数が一般的である。そして、それが同じように反復するという考え方がある。だ

がこれに比してイスラエルでは、すべてのものの開始から、すべてのものの完成へと整えられてゆくことに七であるということが看取される。そして完成の日にはすべてを休めと命ぜられるのである。怠惰で休むのではない。疲労したゆえに休むのでもない。仕事が済んだから休むのではない。神が命じたもうゆえに休むのである。仕事は絶え間なくある。手を拱いているわけにはいかない。だが、神は命ずる、休めと。

さて、イエスは、その父ヨセフも自ら、手に技術をもっていた。パウロも天幕造りを身につけていた。すなわち、「働きたくない者は、食べてはならない」（Ⅱテサロニケ3:10）からである。中世、修道院においても「祈り、かつ働け」がモットーであった。

しかし、ルターに始まるプロテスタンティズムは、職業や労働を積極的に受けとめ、そこに神の召命（ベルーフ）を認め、働くことを通して、神と人ともに仕えることができるのであると考えた。そして中世が修道院生活をこの世における最高の生としたのに対し、世俗の労働は聖職に匹敵する意味を持ち、隣人を愛し仕える道であるとして重視するようになった。この思想が近代の歴史形成に果たした役割は大きい。しかし今日、複雑、多様化の社会機構の中で、キリスト者が職業を通して神の召しに答えて、職業を通して神と人ともに仕えるということが非常に困難になってきた。一キリスト者として、「安息日の起源」を初めとして「今日的な安息日問題」などを以下に考察してみることにした。

1、シャバット（安息日）とシナゴーク

安息日制度は聖書によれば、モーセの時代までさかのぼると考えられる。安息日はユダヤ人にとって聖なるものであるばかりでなく、喜び

でもあった。従って彼らはこの日を恰も花嫁を迎える如くに待望するのであった。そしてこの日に最上の衣服をつけ、最上の食事を用意した。礼拝はシナゴグで行われた。

シナゴグは、第二神殿時代(前520-515)やその後の期間中、イスラエルの地やディアスポラ^{#1}の地におけるユダヤ人社会の最も安定した制度の一つであった。それは町民や村民が聖なる礼拝のために集った場所であり、また全ての宗教的、文化的、社会的な生活が集中した中心であった。これは主として、シナゴグにおける聖なる礼拝という特性に由来した。礼拝者は大勢で活発に参加した。その理由は、彼らが祈禱の詠唱と聖書朗読とを交互に行ったからであり、また全てのそうした機会には少なくとも十人の定足数がいなければならなかったからである。もう一つの顕著な特徴は、シナゴグの礼拝が一定の規則的な間隔を保って頻繁に行なわれたことである。男女や子供たちが、祝祭日や特別な機会にはもとより、毎安息日にもシナゴグに集った。後には、大勢の者が毎日、また時には日に三度も来るようになった。「シナゴグ」という語は、単に「集会の家」の意味に取られてはならない。それは、民衆共同体、会衆、そして彼らが集った場所を表している。

シナゴグの起源については明らかではないが、少なくともパレスチナにおいては神殿奉仕のための組の番に当たった人々が、その地区の場所に集り、エルサレム神殿で行われる犠牲に対応して、そこで聖書を朗読したことに始まると言われる。この「集り」がトーラー^{#2}の朗読と研究の場として発展するのである。この点に関してはディアスポラのシナゴグにおいても同様である。神殿崩壊(前587、エルサレム破壊第一神殿も)以後は神殿での礼拝と犠牲とは一つにされてシナゴグに移された。このためトーラーの朗読と研究が礼拝様式の中で行われるようになった。会衆の前でトーラーを朗読することは、シナゴグ礼拝にとってたいへん重要な位置を占めていた。朗読はヘブル語で行われた。しかし当時の民衆の言葉はヘブル語ではなく、アラム語であった。このためヘブル語でトーラー

が朗読された後、さきに読まれた箇所を一節毎にアラム語に訳して会衆にその意味を取り次ぐ解釈者が必要であった。彼の役割はヘブル語を文字通り通訳するのでもなく、かといってヘブル語のテキストからはずれたことを語るのでもない。どこまでもその意味を分からせるためであり、そのテキストをその時代の人々にとって意味のあるものとさせるため、すなわちテキストを「実現させる」ためである。この聖書註解をトーラー全体に及ぼしたものが、アラム語の「パレスティナ・タルムード」と呼ばれるものである。安息日は、祈ったり、聖書朗読や賢者か会衆の誰かの説明を聞いたりして、会衆は何時間も残留した。人々はまた、安息日や勤労日にも、祈禱のための定刻の時間外にも聖書朗読を聞くためにやって来た。シナゴグは、資金集めや公共事業の決定といったような共同体の用事のために、町の会館としても供用された。学校、法廷、宿泊所のような公共施設がそれに付属させられることもよくあったが、それはなんらかの本来的な必要があったためではなく、事実、建物自体の中から若干の隣接の部屋にその設備が備わっていたためである。しかし、シナゴグの意義の主たる要素は、それが人々の市民的、共同体的精神を表現する、地方のユダヤ人共同体の集会とみなされたという事実であった。

さて、旧約聖書の中では、しばしば「新月」と「安息日」が平行して表されている。

「むなしい献げ物を再び持って来るな。香の煙はわたしの忌み嫌うもの。新月祭、安息日、祝祭など災いを伴う集いにわたしは耐え得ない」
イザヤ 1:13

「どうして、今日その人のもとに行くのか。新月でも安息日でもないのに」列王記下 15:23

「わたしは彼女の楽しみをすべて絶ち、祭り、新月祭、安息日などの祝いをすべてやめさせる」
ホセア 2:13

「お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売尽くしたいものだ」アモス 8:5

「そして君主は、焼き尽くす献げ物、穀物の献

げ物、ぶどう酒の献げ物を巡礼の祭り、新月の祭り、安息日、およびイスラエルの家に定められたすべての祝日にささげねばならない」エゼキエル45:17

上記に見る通り、「安息日」と「新月祭」が平行して述べられているが、イスラエルの安息日は、月の満ち欠けと関連して設定された他の日々とも関係しない。つまり月神礼拝とは何の関係もない。第7日(創世記2:3)、すなわち「シャバット」とは、特別な名称であり、永遠的な秩序であって、天のさまざまなしるしやいかなる占星術的観念とも無関係の独自のものである。それは天の万象の礼拝のために指定された日ではなく、天の万象、すなわち宇宙の創造者を聖別した日であり、創造の業を記念したものであって、自己苦痛や、不幸の日ではない。祝福の日である。そして、それは民族としてのイスラエルの成立よりも古く、かつイスラエルのみならず、全人類に与えられたものであることをトーラーは強調している(創世記2:2-3)。

すなわち、祝祭が時間内に生起する出来事を祝うのに対して、暦の中で各祝祭に指定されている月日は、自然における生によって規定されている。たとえば、過越祭と仮庵祭は満月と一致し、すべての祝祭日は月内の日である。そして暦の月は自然の世界内で周期的に生起している現象を反映している。ユダヤ月は新月とともに、すなわち夕暮れの空に細い月が再現する時にはじまる。これとは対照的に安息日は暦の月からまったく独立しており、天上の月とは無関係である。その日付は自然のいかなる出来事によっても決定されない。たとえば新月によって決められるのではなく、〈神による〉創造行為によって決められるのである。

かくして、安息日の本質は空間世界とはまったく別次元に属している。安息日の意味は空間よりもむしろ時間を寿ぐことである。

2. 安息日の厳守と安息年とヨベルの年

「六日の間は仕事をすることができるが、第七日はあなたたちにとって聖なる日であり、主の最も厳かな安息日である。その日には仕事をす

る者はすべて死刑に処せられる。」出エジプト35:2

毎週の安息日は、ユダヤ教にとって、神の選びのしるしであった。すなわち、「万物の創造者は祝福はされたが、すべての民族、国民を聖別してその日に安息日を守らせることはされなかった。ただひとりイスラエルだけは別で、これだけにその日地上で食い飲みし、安息をとることを許された。」ヨベル2:31

安息日の戒命はトーラーに記された他のすべての戒めに匹敵するほど重要であった。イスラエルが二つの安息日(出エジプト記と申命記をさす)を守りさえすれば、約束された贖い(メシア)は到来すると考えられた。このように安息日の戒めは律法の中心を占めるものとなった。それはユダヤ国民にとって国家の喪失に伴う民族(主の民)の崩壊・解体の危機から自らを守るためにとられた自然の帰結であったのである。

ヨベル書によると、安息日はその他の祭日とともにそれがモーセによって命じられたはるか以前に族長たちにすでに知られていたとされる(ヨベル1:10, 14, 2:1)。またヨベル書は安息日に禁止された行為の最も古い詳細なリストを含んでいる。特に注目されることは、死刑の対象とされる安息日違反行為が列挙されていることで、その中にはあらゆる戦闘行為、農作業、動物の殺害(2:27)、水汲み(50:28)、船旅、狩猟(50:12)のほかに夫婦間の性交(50:8)や断食(50:12)までが含まれている。

さて、申命記の十戒が成立した(前7世紀)頃は、まだ安息日における労働の禁止についての厳密な規定はなかった。しかし、捕囚直前から捕囚時代にかけて(前597エルサレム陥落、第1回バビロン捕囚、前587第2回バビロン捕囚、前583第3回バビロン捕囚)、つまりイスラエル民族の将来と存続が真剣に問われる中で、彼らの伝統的安息日の評価が急激に高まり、それを守ることが、亡国後の選民の維持に不可欠の要素とされるにいたった。エレミヤは荷物(市場で売買する品物)を安息日にエルサレム市内に運ぶことを許すユダの支配者や住民を口をきわめて非難している(エレミヤ17:19-27)。そして

前例のない預言をもって、ユダ王朝とエルサレムの運命は安息日を遵守するか否かにかかっていることを宣言する。エゼキエルも同様の預言をしている(エゼキエル20:12-24)。彼は安息日を神がイスラエルを聖別したことのしるしと呼んだ。エゼキエルはそのしるしの具体化として、やがて再興さるべき神殿における安息日に捧げる犠牲の数や種類に関する細則まで指示した(同上46:4)。捕囚時代のいわゆる第三イザヤ(56章~66章)もまた安息日の遵守を高調し、それは個人的及び国民的復興の前提要件として、他のすべての契約義務と平行させている。すなわち、

「いかに幸いなことか、このように行う人

それを固く守る人の子は。

安息日を守り、それを汚すことのない人

悪事に手をつけないように自戒する人は。」イ

ザヤ56:2

「なぜなら、主はこういわれる

宦官が、わたしの安息日を常に守り

わたしの望むことを選び

わたしの契約を固く守るなら」同上:4

「また、主のもとに集って来た異邦人が

主に仕え、主の名を愛し、その僕となり、

安息日を守り、それを汚すことなく

わたしの契約を固く守るなら」同上:6

しかも、おどろくべきことは、彼によると安息日はイスラエルのみならず、すべての国民にも適用さるべき普遍的律法であるとされていることであり(同上:6)、「わたしの契約を固く守るなら、わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き、わたしの祈りの家の喜びの祝いに連なることを許す」(同上:7)。これは、下記のソロモンの神殿の献堂の祈りに対応するものである。

「あなたの民イスラエルに属さない異国人が、御名を慕い、遠い国から来て、—それは彼らが大きい御名と力強い御手と伸ばされた御腕のことを耳にするからです—この神殿に来て祈るなら、あなたはお住まいである天にいましてそれに耳を傾け、その異国人があなたに叫び求めることをすべてかなえてください。こうして、地上のすべての民は御名を知り、あなたの民イ

スラエルと同様にあなたを畏れ敬い、わたしの建てたこの神殿が御名をもって呼ばれていることを知るでしょう。」列王上8:41-43。

この預言者たちの安息日遵守の重要性の強調は、捕囚後ユダヤの統治者として派遣されたネヘミヤも踏襲され、彼のエルサレム統治の原理とされた。祭司的律法もまた安息日の戒律に特別の意義を付与し、エゼキエルと同じく安息日を「わたし(ヤハウエ)の安息日」と呼び、「わたし(ヤハウエ)とイスラエルの人々との間のしるし」とよんでいる(出31:13, 17)。かくして捕囚期以後は安息日は割礼と共にイスラエルと神ヤハウエとのしるしとして最も重要な律法的儀礼となった。

そして、捕囚期以後の安息日制度は厳格な法制化、律法化によって特色づけられることになった。そして、それは内面的な生命の躍動よりも、外面的な生活の規制が重要視せられ、精神的なものへの服従となったのである。

たしかに安息日における業務静止の条項は詳細に規定された。火を燃やすことの禁止(出35:3)、荷物を運ぶことの禁止(エレミヤ17:21, 24, 27)、取引をすることの禁止(ネヘミヤ10:31)、葡萄絞り器を踏み、家畜に荷を負わせ、市を開くことの禁止(ネヘミヤ13:15-22)などである。さらに安息日遵守が督励され、警告としてこの日を汚す(守らない)者は死刑に処せられるとされ(出31:13-17)、実際に荒野で安息日にたきぎを集めているところを発見された者が処刑されている(民15:32-36)。

さらに再興された神殿(前520—515)における安息日のための犠牲奉献の条項が規定された。毎週この日には「供えのパン」が新しくされる(レビ24:8, 歴代上9:32)。そして2匹の傷のない1歳の小羊が穀物と葡萄酒の供え物と一緒に捧げられる(民28:9—)。神殿歌手たちは詩篇92を賛美する。

捕囚後の社会においてはたしかに安息日の戒律は、神の律法の中で最も重要な部分となり、ヤハウエが律法を与えたことと、安息日を聖とすることを命じたことは同一事実を意味した。安息日の神聖を守り、それを喜びと呼ぶ者は主

を喜ばせることであるとされた(イザヤ58:13)。

ミシュナー(「反復する」というヘブル語の動詞 shānāh に由来する名詞で、「反復」「口伝による教育」「口伝トラー、慣習法」を意味する。)に規定された安息日に禁止された主要な労働は40に一つ足りない数すなわち39とされている。以下がそのリストである。

- ① 種を蒔くこと
- ② 耕すこと
- ③ 刈り取ること
- ④ 束ねること(束を)
- ⑤ 脱穀すること
- ⑥ 籾殻を吹きわけること
- ⑦ ふるいにかける(選別する)こと
- ⑧ 粉をひくこと
- ⑨ ふるいわけること(粉を)
- ⑩ こねること(粉を)
- ⑪ 焼くこと(パンを)
- ⑫ 羊毛を鋏みで刈り込むこと
- ⑬ 羊毛を漂白すること
- ⑭ 羊毛を梳くこと
- ⑮ 羊毛を染めること
- ⑯ 羊毛を紡ぐこと
- ⑰ 羊毛を織ること
- ⑱ 羊毛を引っ張ること
- ⑲ 羊毛を縫うこと
- ⑳ 二本の糸を分けること
- ㉑ 二枚の布切れを結び合わせる
- ㉒ び目をほどくこと
- ㉓ 縫い合わせる
- ㉔ 二枚の布切れを縫うために裂くこと
- ㉕ ガゼルを捕らえること
- ㉖ ガゼルを殺すこと
- ㉗ ガゼルの皮を剥ぐこと
- ㉘ ガゼルの皮を塩に漬けること
- ㉙ ガゼルの皮をなめすこと
- ㉚ ガゼルの皮をこすってなめらかにすること
- ㉛ ガゼルの皮を裁断すること
- ㉜ 二文字を書くこと
- ㉝ 再び二文字を書くためにこすり消すこと
- ㉞ 建てること
- ㉟ 引き倒すこと

③⑥ 火をつけること

③⑦ 火を消すこと

③⑧ 槌でたたくこと

③⑨ 一つの場所から他の場所へ物を運ぶこと

これらの禁止労働のリストは、あまりにも粗略である。ほかにもっと重要な禁止すべき労働が多くあったはずである。たとえば取り引き上の業務とか病気の治療とか、これにはみられない。きわめて不完全な規定といわざるをえない。そうしたさらに重大なことがらは個人の自由な判断に任せてよいと考えられたのであろうか。ラビたちは安息日における労働の禁止に関する指示を与えている旧約聖書の章句を正確に解釈することに特別な考慮を払った。たとえば、出エジプト記35:3によって、安息日に火をつけることはできなかったため、安息日用のランプの火は安息日の始まる前につけられねばならないとした。さらに安息日に許された歩行距離を200ペキス(1ペキス約46cm、200ペキス約97m)までとした。これは「安息日の限界」と呼ばれた。また彼らは安息日律法の破棄を許すべき特例を設けた。たとえば、祭司たちは安息日においても安息日のための捧げ物を執り行わなければならなかった。さらに重要な特例として、ユダヤ人が生命の危険の状態にある時は安息日を破ることができた。また安息日に逃走して自分の生命を救うことも許された。誰かが安息日に瀕死の病気にあった時は、助け(治療)が施さるべきであった。つまり生命の救助は安息日の遵守に優先するとされた。しかしこれは生命の危険がある場合にのみ適用される。生命の危険がないと判断される場合は病人を看護するには安息日の終わるのを待たなければならない。もし安息日に子供が生まれ始めたなら、産婆は産婦の分娩を助けることが許された。もし火事が発生した時は、緊急の救出作業は許された。最後に、安息日はすべてイスラエルの男子は生後8日目に割礼を受けるという戒規(創17:10-12、レビ12:3)にその優位をゆずった。すなわち、割礼はもし生後8日目が安息日に当たる場合は、安息日であっても執行される。

聖書は、さらに安息日を越えて安息年につい

て語る。神は単に第七の日を聖別なさただけでなく、六年ごとに第七の年を聖別なさった。中でも驚くことには、土地を七年目ごとに休ませなくてはならないということである。そのときイスラエルは、ただ自然に生い育つものだけで一年間を過ごさなくてはならない。ラビの記録によると、アレクサンダー大王はこの安息年を重んじて、イスラエルに一年分の税金を免除したと言われている。

さらにまた、七年の七倍、つまり四十九年がすぎると、第五十年目(ヨベルの年=解放の年)が大安息年となる。それは、神によって定められた、諸関係における全き自由、更新、立て直しの年とならなければならない(レビ記25章)。すなわち、大量の富の形成と貧困の発生のバランスをとるためである。したがって、その時には、負債のために奴隷の境遇に身を落としていた同胞は、自由を獲得する。また、四十九年の間にその相続財産を失った者は、先祖伝来の土地に帰ることが許されるのである。

3. ユダヤ教における安息日の祝い

聖書によれば、この世界は神が「光あれ」と言われたので創造された。この「光」の創造という最初の御業によって、すべてのエネルギーの根源が創造されたと言ってよい。ユダヤの家庭では、安息日ごとにこの聖書の天地創造が再現されている。神が初めに「光あれ」と言われたのに因んで、安息日は光の祝福を唱えて始まる。六日間にわたる激しい創造の業の後、神は人間にすべての創造の業、労働をやめ、魂が休息する時を持つように命じられておられる。

ユダヤ教では、安息日は「女王」また「花嫁」と呼ばれ、喜びをもって迎えられた。この日はもっぱら休息と活力の回復のために過ごされ、家庭において、そしてシナゴグの礼拝において祝われた。安息日の半分は飲食のだんらんにあて、あとの半分は学びの家で過ごした。安息日は、半分は他のため、半分は自分のため、すなわち一部は宗教的奉仕とトーラー研究のため、一部はくつろぎと共同の食事のために過ごす日とされた。「安息日と祝日はトーラー研究のため

のみに与えられた」ともいわれ、トーラーの学習に重点がおかれたことは重要である。それは昔安息日に預言者エリシャのもとに人々が訪ねてその指導を受けた故事(列王下4:22-23)に倣ったものである。いずれにしても、安息日は喜びと楽しみを以って迎えかつ過ごさねばならない。特にトーラーの学びは最高のレジャーと考えられた。そして「安息日は心からの歓喜の精神を以って祝われねばならず、絶対に強制されて守るべきではない。安息日規定の法的規制によって、やむなく不本意な気持ちでまもられるようなことがあってはならない。」とされている。安息日は神からの「良き賜物」であった。

(1) 家庭での祝い

安息日のための準備はすべて金曜日に用意された。誰しも金曜日は朝早く起きなければならない。それは安息日を祝うのに必要なものを購入するためである。安息日の食物は、当日は火も使えず、調理もできないので、前日に用意されねばならない。安息日の食事の用意にはできるだけ家族全員の参加がもとめられた。エズラの掟によれば、ユダヤ婦人は金曜日の朝、貧しい人々に施すためのパンを焼くことがすすめられている。髪をくしけずったり、指の爪を切ったりすることは安息日の到来以前にしなければならない。普段着から安息日用の上等の衣服に着替えねばならない。食卓は昼間のうちに用意しなければならない。後に食卓は白い布で被うようになった。それはマナ(出エジプト16:31-36)を記念するためであった。またマナを暗示して2個のひねったパンが食卓におかれた。用意された安息日食物はある一定の状態で慎重に保温される(現在はガスレンジが使用される)。

それから安息日の燭台が配置される。燭台は2本用意される。それは出エジプト記20章の「安息日を憶えよ」と申命記5章の「安息日を守れ」の双方を表すためである。

それからいよいよ安息日が到来すると、エルサレムでは神殿の祭司、地方においてはシナゴグの係りの者が、ラッパ(角笛)を三度吹き鳴らして安息日の到来を告知する。これは安息日の終わりを告げるためにも行われた。このラッ

パの吹奏によって世俗的なものと聖なるものと
の区別が宣言される。その時人々は額と手から
経礼⁸³を外さねばならない。そしてシャバット・ラ
ンプ（安息日用のランプ）に火をともし、祝日
にふさわしい装いを身にまとう。安息日の開始
はこのように「その日の奉献」の儀礼を以って
先導される。もし二つの杯に十分な葡萄酒があ
れば、まず一番目の杯に葡萄酒が混ぜ合わされ、
それに対して祝福が宣言される。家長は二番目
の杯に対していわゆるキドウシ（聖別の祈禱）
といわれるその日の聖別を宣言する。ラビ・エ
リエゼル（ラビ＝ユダヤ教の教師。もともとは賢
者の尊称。1世紀末の人物）は次のような聖別の
言葉を残している。「私の父はいつも『安息日を
聖別したまえる者に祝福あれ』と唱えた」。バビ
ロニア・タルムード⁸⁴には、もっと長い式文があ
る。「愛によって休息のための安息日をするしと
契約としてイスラエルに与えたまいし者に祝福
あれ。安息日を聖別したまえる者に祝福あれ」。

安息日は最良の食事によって特徴づけられる
（ヨベル2:21, 31, 50:9）。通常は週日には食
事は2回しかとらないが、安息日には3回とる。
エルサレム・タルムード⁸⁵には、安息日を大いに
楽しむために、前日は食事の量を減らし、安息
日は空腹で迎えるべきであるという忠告まであ
る。安息日の主要食事は通常シナゴグ礼拝後
の昼にもたれる。安息日にはしばしば客が招待
され、惜しみなくもてなされる（ルカ14:1参照）。
安息日に断食することは、祝祭の喜びを妨げる
ものとして禁じられた。ヨベル書では、断食者
は死刑に処せられるとされている（50:12）。

安息日が終わった時、聖と俗の区別は再び特
別な祝福（ハブダラ「区別」「分離」の意味）で
表された。「聖と俗とを、光と闇とをイスラエル
と異邦人とを、第7番目の日と6日間の労働の
日とを、不浄と清潔とを、海と乾いた地とを、
上にある水と下にある水とを、祭司・レビ人と
イスラエルを区別したまう者に祝福あれ」が唱
えられる。この区別の祈りによって安息日は厳
かに送りだされ、新しい週が始まる。今日では
この安息日を見送ったあと、互いにシャブーア・
トープ（良き一週を）という挨拶を交わす。

（2）シナゴグでの礼拝

神殿では、安息日毎に定められた供え物が捧
げられた。傷のない2頭の小羊と油を混ぜ合わ
せた小麦粉を10分の2エファ及び肉の捧げ物が
特定の飲み物の捧げ物と一緒に捧げられた（民
28:9-11）。安息日には週日の捧げ物以外に、こ
れらの捧げ物が追加されたために、いつもより
多くの祭司が必要とされた。また安息日に香の
鉢を供えのパンの机の上に置き、供えのパンを
取りかえるために、特に2人のエキストラ祭司
が指名された。公務を執行する祭司の当番の交
替は常に安息日に行われた。当番を終える祭司
は朝の犠牲を、当番の始まる祭司は夜の犠牲を
捧げた。安息日のための歌唱として詩篇92編が
指定された。

パレスチナでもディアスポラの間でも、礼拝
は安息日にはシナゴグで行われた。シナゴ
グは、既述したが、始めから安息日の礼拝のた
めに設けられたものではなく、初めはユダヤ人
共同体の世俗的な集会の場所であり、また律法
の教育機関であった。それから次第に礼拝の場
となり、地方のコミュニティの宗教センターに
発展したと考えられてる。その起源については
古来さまざまな伝承と異説があり、族長やモー
セにまでさかのぼらせる伝承があるが、一般に
はバビロン捕囚時代以後とされている。安息日
礼拝が行われるようになったのは、パレスチナ
本土ではエズラ（前3世紀）以後であり、おそ
くともマカビー時代頃には確立されていたと考
えられる。というのはアンティオコス・エピファ
ーネス（前175—164在位）の迫害中に律法の写
本が没収されて焼き払われたといわれており（1
マカベア1:56）、そうした迫害に抵抗して立ち
上がったマカベア家の反乱（前167）も律法に対
する異常なまでに熱情的な献身にもとづいたも
のであり、そうした彼らの律法への献身的熱愛
を涵養したのはシナゴグにおける教育であつ
たと考えることができるからである。しかも律
法書が手当たり次第没収され焼かれたというの
は、律法書がかなり国民の間に流布し、これを
研究し、学習する機関が存在したことを暗示し
ている。

シナゴークでの安息日礼拝の中心は聖書即ちトーラと預言者の朗読にあった。トーラは最初は3年サイクル制に従って実施されたが、後には1年サイクル制になり、54の区分に分けられた。預言者の方は新約時代まで固定された規則はなく、朗読者の自由に任されていたようである。これらの朗読には、パレスチナとバビロニアではアラム語の通訳がついた。それは後に成文化されてそれぞれのタルグーム（アラム語訳の旧約聖書）になった。地中海沿岸地方ではギリシャ語の通訳がつき、後にこれは七十人訳聖書⁶⁶に結集された。聖書朗読の後に、一種の講解説教がなされたが、これは礼拝の不可欠の要素ではなかった。説教（新約聖書では「奨励」使13:15）は通常はそのシナゴークに属するラビに委任された。しかしそれはトーラよりも預言者にもとづいてなされたようである（ルカ4:21参照）。シナゴーク礼拝の不可欠の要素として、他に幾つかの祈りがある。その中で最も重要なのはシェマと18祈願⁶⁷である。初期には十戒の朗読がシェマの前部に含まれていたが、後にユダヤ教から独立したキリスト教の礼拝のリタージュにおける十戒の用法と同一視されることを避けて中止され、朗読から外された。シェマは最初は申命記6章4-9節だけだったが、後に、申命記11章13-21節が追加され、さらにローマ時代に、民数記5章37-41節が追加された。これらは祈りというよりもイスラエルの信仰告白の定式である。このシェマの前後に三つの小さい祈りがあった。一つはシェマの前に、主の創造の業の賛美と神の選びの愛への賛美があり、シェマの後に主の贖いを賛美する言葉があった。

シェマの宣言の後に続くのが、18祈願で、これもイスラエス民族の雄大な信仰宣言を構成する式文で、詩篇51篇15節の句を以って始まる18カ条から成っている。これらの祈りの故にシナゴークは「祈りの家」とも呼ばれた。むしろこの名称の方がシナゴークよりも古いとされる。この祈りの精神は預言者エレミヤに負うところが大きい。この祈りの成文化された神の言葉の朗読を中心とした礼拝形式は後にキリスト教の「神の言葉による礼拝」のパターンの基本となった。

またシナゴーク礼拝の特徴として見のがすことのできない重要な要素はその世界主義的理念である。それはすでに見てきたように、イザヤの安息日の理念に現れているところであるが（イザヤ51:6-7）、ユダヤ的唯一神教を世界に布教伝達することはイスラエル選民の使命とされ、彼らのそうした使命をはたすべき手段としてシナゴークの安息日礼拝が用いられたのである。

4. 新約聖書における安息日

新約聖書における安息日制度はユダヤ教のそれと一致する。イエスの遺体は安息日の神聖を汚さないように、準備の日（金曜日）のうちに十字架から降ろされた（マルコ15:42-47、ヨハネ19:42）。安息日の神聖は労働の厳しい禁止によって守られた。すべての刈り入れ、穂をむしることさえ禁じられていた（マルコ2:23）。病人への助けや癒しは、死の危険のない限り認められなかった（マルコ3:1、ルカ13:14、14:3、ヨハネ7:23、9:14）。どんな物でも安息日に持ち運ぶことは許されなかった（ヨハネ5:10）。安息日礼拝は許された距離しか移動できなかった（使徒1:12）。安息日礼拝は地方のシナゴークでは厳格に守られ、トーラーと預言者が読まれ、その解説もなされた（ルカ4:16-20、使徒13:15、27、15:21）。

5. 安息日論争

(1) 安息日に麦の穂を摘むことの可否（マルコ2:23-28、マタイ12:1-8、ルカ6:1-5）。イエスの弟子たちが空腹の故に、安息日に畑から麦の穂を摘んで食べたことがファリサイ派の抗議を受ける結果となった。平日なら他人の畑の穂を摘んで食べても罪にはならなかった（申23:25）。それが安息日だったので問題とされたのである。

それに対してイエスはその昔ダビデがサウルから追われ、窮乏と生命の危機の中にあった時に、大祭司アビアタルにたのんで、安息日に新しく取り替えたパンの代わりに取り下げた古いパン—それは祭司だけが食べることができた（レビ24:8）—を受け取って食べたという故事（1

サム21:1-7)を引いて、弟子たちの行為を正当化しようとした。

果たしてイエスの弟子たちはその日に生命の危険にさらされるほど窮乏していたかどうかは問題であるが、イエスはとっさの気転で弟子たちの行為を弁護するためにこの故事を思いついたのであろう。ここに記されている穂を「摘む」という動作が安息日に禁止された刈り入れという労働行為に当たることがファリサイの非難の原因となったのである。

三つの平行記事の中でマルコ福音書のみある「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子も安息日の主でもある」(マルコ2:24-28)というイエスの言葉は、安息日律法に対するイエスの批判と考えられるが、重要な問題は共通して記されている。すなわち、「人の子は安息日の主でもある」(マタイ12:8, ルカ6:5)という句であろう。この「人の子」をイエス自身をさすすれば、一通常メシヤとしてのイエスと考えられているが—イエスに安息日規定を自由にコントロール神的権能を付与しようとする初代教会の見解を反映するものといえる。ここに用いられている「主」とはいうまでもなく神と同一視される用語だからである。

マタイ12:6では、イエスは自ら「神殿よりも偉大なものがここにある」と述べているが、ヨハネ福音書2:21では、イエスこそが、真の神殿とされている。そして、神殿は安息日に優先するとされていたのである(マタイ12:5)。

(2) 安息日における病人のいやし

イエスは安息日にさまざまないやしを行ったが、そのことがファリサイたちの攻撃的となった。たとえば、手の萎えた人のいやし(マタイ12:9-14, マルコ3:1-6, ルカ6:6-11), 腰の曲がった婦人のいやし(ルカ13:10-17), 水腫の者のいやし(ルカ14:1-6), ベテスダの池での病んで横たわっていた者(ヨハネ5:1-13)などである。

これらの記事は、いずれも安息日における癒しについての論争である。しかしこれらの記事においてはたしてイエスは安息日律法に違反し

た行為をしたのであろうか。

手の萎えた人をいやした場合はただ「手を伸ばしなさい」と語りかけただけであり、腰の曲がった者には「婦人よ、病気は治った」と言って患部に手をおいただけである。イエスは治療に際して何も医療的な処方をしていないわけではない。イエスの治療行為には当時の安息日規定に反するものは見当たらないといってよい。またヨハネ5章のベテスダの池でいやされた病人が床(寝台用のマット)を運んだことは、39の禁止行為に含まれた戒律違反である。そして、この場合の病人は38年間も治らなかった慢性の病であって、生命にかかわる緊急の治療を要するものではなかったかも知れない。しかしイエスはやはり安息日に優先すべき人命救助に当たる正当行為と考えられたのであろう。ベテスダの池での治療という行為は、この池が神殿付属の祭儀用(神殿に捧げる羊を洗浄するために使われた)の池としての機能を喪い、神殿消失後ローマ社会に圧倒的支配力を有した医神アスクレピオス⁸⁸の治療祭儀用に転用されるようになってからの状況を反映しており、明らかにイエス時代の事件を扱ったものではない(関谷定夫「聖書のあけぼの—考古学的アプローチ—」p102-106)。ここに登場するイエスはアスクレピオス神に優る真の治癒者としてのイエスである。しかもイエスは安息日は創造主の安息日(創世記2:2)というユダヤ教の伝統的解釈に対して、創造主は今も働いておられ、その業は完成していないとすることによって、イエスの安息日における治療行為の妥当性を主張している。これはヨハネ福音書記者がユダヤ教の安息日制度の破棄に及んだ初代教会の立場の正当性の論拠を生前のイエスの言葉の権威にもとめようと意図したことを示すものと考えてよいであろう。

イエスは人びとからラビと呼ばれ(おそらく尊称)、安息日毎にシナゴグで説教をした。使徒たちも同じように、安息日の礼拝を守った。イエスは決してトーラーによって命じられた主の安息日を否定するようなことはなさらなかった。イエスはあくまでトーラーを廃するためではなく、むしろ完成するために来たという自覚を

有し、トーラーの神聖を守ることに固執した(マタイ 5:17-20)。

それにもかかわらず、マタイによれば、イエスは安息日の戒律を破っただけでなく、自分を神殿以上の者とし(マタイ12:6)、ヨハネによれば、神を自分の父と呼んで、自己を神と等しい者としたとし(ヨハネ 5:18)、そのことがイエスに対するファリサイたちの殺害計画の原因となったとされている。ヨハネ 9:1-23のシロアムの池での盲人の癒しも安息日の出来事であった。イエスが唾を土でこねて彼の目にぬったという行為、この「こねる」動作は39の禁止行為に含まれた行為だったことが、ファリサイたちの非難の的となったことはあり得ることである。

いずれにしても、これらのテキストの中で何度も問題になっている「安息日に病気を治すのは、律法で許されていますか」(マタイ12:10, ルカ14:3)ということについては、人命尊重ということがトーラーの根本精神であり、人命救助が安息日に優先することはユダヤ教においては自明のことだったのである(ルカ14:5-6)。

6. キリスト教会における安息日

四つの福音書の一致した証言によれば、イエスは準備の(金曜)日に十字架につけられた(マタイ27:62, マルコ15:41, ルカ23:54, ヨハネ19:31, 42)。そして週の第一日(日曜日)に死から甦った。初代キリスト教会はこの週の第一日を「第八日」と呼び(「バルナバの手紙」第15章)、この日に集会を持ち、この日を「主の日」としてイエスの復活を記念して礼拝をまもった。神殿が存在した時代は、ユダヤ人キリスト教徒は律法と安息日の遵守に固執していた。彼らはイエス自身が安息日を守られたことを強調した。ディアスポラにおいても、ユダヤ人キリスト教徒たちは、彼らがユダヤ人としてのアイデンティティを有する限り、安息日を厳守し続けた。しかし異邦人キリスト教徒たちは、一般にユダヤ主義者たちの圧力によって割礼を受け入れたが、安息日まで守ることはしなかった。注目すべきことは、安息日遵守はユダヤ人の特権とされ、それはユダヤ人との社会的関係を規定する必須

条件であったにもかかわらず、それはエルサレム会議によって要求されなかったことである(使徒15:28f)。

パウロは直接には一回だけ(コロサイ 2:16)、間接的には二回(ローマ14:5, ガラテヤ 4:10)安息日に言及しているだけである。すなわち、彼の言及は安息日遵守に対してはきわめて消極的である。「ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは各自が自分の確信に基づいて決めるべきことです」(ローマ14:5)といい、「あなたたちは食べ物や飲み物のこと、また、祭りや新月や安息日のことでだれにも批評されてはなりません。これらは来るべきものの影であって、実体はキリストにあります」(コロサイ 2:17)といっている。パウロは割礼を精神化し、事実上律法としての割礼を否定したように、安息日をも精神化し、消極的立場をとったと見てよいであろう。たしかに多くの異邦人改宗者、特に奴隷たちの社会条件は安息日を守ることを不可能にしていた。

キリスト教徒は、シナゴグから締め出されるまでは、シナゴグ礼拝に出席し続けた。彼らは安息日礼拝に唱えられるかの18祈禱文の中に紀元年頃追加されたいわゆる異端呪詛文によって、徐々にシナゴグから締め出されていった。その最古の形は次のようであった。

「背教者たちに希望なからしめたまえ、ナザレ人と異端の徒をただちに滅ぼさしめたまえ」。このことから初代教会は主の晩餐の集りの最も自然な時間を安息日の夕方つまり日曜日の始まりとするにいたった。使徒言行録20章7節の「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集っていると」という言及はまさしくこのことをさしている。ところがトラヤヌス帝(52-117AD.)治下で、この夕方の集りは明らかに違法とされ、夕方の集りは日曜日の早朝に移された。この移動によって、それまでの安息日との最後の絆が断ち切れ、それはキリストの復活と結び付けられることになった。これによって日曜日礼拝が明確に正当化され、固定化された。このような自然の成り行きによる変更は徐々にではあっ

たが、速かった。しかし、復活日を曜日にかわりなく、ユダヤ教の過越祭に合わせて、ニサンの月³⁰の14日に行うべきであるとする説、結局ニカイア会議（325AD）以後、アレキサンドリア起源の太陽暦に従い、春分（3月21日）の後の最初の満月の次の日曜日に行うことになった。それまでの2世紀の末まで、イースターが日曜日でなければならないということは、すべての教会にとって自明のことではなかったのである。教会における募金についてのべられたコリント第一16章2節には「週の初めの日」の言及はあるが、その日に持たれた教会の集りについてはふれられていない。黙示録（1:10）の「主の日」はおそらく日曜日だったと思われるが（ドミティアヌス帝=81-96、またはネロ帝時代=54-68）、もともと「主の日」とは旧約では終末的「主の審きの日」を意味したのであり、曜日とは関係がない。それでこの場合の「主の日」はキリストの復活した曜日をさしていたのかどうか確証はない。

ディダケー³¹⁰14章1節では「汝ら主の日には相会し、パンを裂いて聖餐式を行うべきである」とされている。アンテオケのイグナティウスは、「もはや安息日を守らず、むしろ「主の日」（日曜日）を守って生きる」と言い、「キリスト教がユダヤ教に基礎づけられるのではなく、ユダヤ教がキリスト教に基礎をおくからである」と主張している（八木誠一訳「イグナティオスの手紙—マグネシアのキリスト者へ」『使徒教父文書聖書の世界別巻4新約Ⅱ』117頁）。殉教者ユスティノスによると、当時はまだ土曜日と日曜日の礼拝が平行して守られており、日曜日の礼拝は、神の創造の第1日と関連づけられている。それ以後、「主の日」という用語は急速に規範的用語となった。

キリスト教徒が毎週、週の初めの日を「主の日」として守るようになったのはなぜなのか。それはおそらく当時東洋では週に一度と月に一度異教徒が「ローマ皇帝の日」として特別の日を守っていたことに対抗する意図から生まれたものであろう。安息日と日曜日とを同一視した証拠は3世紀の終わりまでではなく、3世紀の終

わり頃までに、安息日の霊的遵守が次第に強調されて行き、コンスタンティヌス帝治下の321年の法令によって「尊厳なる太陽の日」が休日とされ、公的業務の停止と法廷の休止がもとめられた。ただし農耕の仕事は除外された。それ以来日曜休日の緊急性が徐々に強化されて行った。しかしその日に人々は礼拝に出席することは自由でなければならなかった。決してそれは「キリスト教徒の安息日」という性格のものではなかった、この語法は12世紀までは使われなかった。

宗教改革者たち、ルター、ツウイングリ、ノックスたちは日曜日は休みと礼拝の日であることを強調したが、キリスト教徒が安息日を守る日と考えることを拒否した。ヨーロッパではなく、英国では、ピューリタンによる厳格主義者の反動が起こった。1953年に Nicolas Bownde はそれに古典的表現を与えた。スコットランドは1579年にすでに「安息日厳守法」(Sabbatarian Legislation) を採択した。これはニコラス・バウンデの著作である「安息日の真の教理」(True Doctrine of the Sabbath) にその起源があるといわれ、これは旧約時代及びユダヤ教における安息日をそのまま日曜日に適用したものである。その日には商取引や旅行は勿論、訪問、接待その他すべてのレクリエーションを禁じた。

イングランドもピューリタンが市民戦争で勝利した後、それに倣った。アメリカのニュー・イングランドのほとんどに同様の法律が強制施行された。17世紀には同地のバプテスト教会の中から、ユダヤ教に倣って聖日として第7日目（土曜日）を厳守したセブンスディ・バプテストが生まれた。（木村文太郎・松田正三「バプテストの信仰と歴史」1970 138, 142頁）

このグループはイギリスの宗教改革におけるバプテストから起こった。イギリスの最初のセブンスディ・バプテストは1650年に結成され、アメリカでは1671年ロードアイランドのニューポートで結成された。さらにそれらを統括するセブンスディ・バプテスト総同盟が1801年に結成された。またその教派的活動としてセブンスディ・バプテスト宣教会、アメリカン・サバス・トラクト協会、セブンスディ・バプテスト・キ

リスト教育同盟、セブンスディ・バプテスト歴史協会などがあり、このグループによって設立されたカレッジがニューヨーク州の Alfred その他にあり、アルフレッド大学の中に神学校もある。この教派の建物はニュージャージー州の plain field にある。機関誌として The Sabbath Recorder を出している。この教派に属する教会はアメリカに62, その他の国に67あり、会員総数は1955年8,812名である。—Encyclopedia of Southern Baptist II 1958による—。ちなみに、イスラエルでは、バプテスト教会は他のプロテスタントも同じだが、土曜日に礼拝を行っている。それは恐らく伝道の目的上、国状にあわせたためであろう。伝道的リバイバリズムと中産階級の成長に伴って、英国ではこれらの法律は益々強固なものになり、ヨーロッパにおけるサバタリアン・グループの成長を促した。しかしその後では、特にイングランドにおいては、日曜日の遵守は宗教的にも法的にも19世紀の半ば以降はひどく衰退して行った。その主な影響は大都市の発展だった。労働階級の大規模な蜂起があり、大量に既成宗教からの離脱者が出た。ラジオやテレビジョンの公的事業の発展も労働者の働きのために日曜日労働の要求を促した。

7. まとめ

そもそも「安息日」を守る、それを七日毎に規定しているということは、旧約聖書にその根拠をもつことを以上にのべてきたが、ここで、以下にまとめてみることにする。

第一に、安息日はキリスト教徒にとっては、主イエスの復活を記念するために、日曜日に制定されたのであるが、その由来と精神は旧約聖書と初期ユダヤ教にもとづくもので、それは神の天地創造の第一日目にあたっている。本来は神がその創造の業を終えて休まれた第七日目(土曜日)であった。それは特に「主の安息日」(シャバト・ラドーナイ)といわれ、主に所属する日で、主に返上すべき日とされる。すなわちわれわれが生きている世界と時間の主たる神を憶え、感謝する日である。それは具体的には週毎の公的礼拝によって表される。しかし安息聖日とい

えども一日中宗教的奉仕にのみ費やされねばならないのではない。ユダヤの賢人が「半分は神のため、半分は自分のためにある」といったように、また神が創造の業を休み、元気を回復されたように、人間もこの日は、仕事を休み、活力の更新のために肉体的にも精神的にもくつろぎ、自己の健康をとりもどすことに意を用うべきである。ユダヤの民が他の六日間は日に二度の食事をこの日は三度とり、しかも最上の食事を楽しんだように、週で最も楽しい日でなければならぬ。安息日は人間の旅路における週毎に停車する肉体及び精神の停留所である。あくまでもそれはわれわれの肉体と道徳的、精神的健康の保持のために過ごされねばならない。第二に、安息日は申命記(5:12-15)の十戒に宣言されているように、神による解放と自由のシンボルである。聖書は労働の神聖と尊厳を宣言した最初の法典である。いかなる権力も生きるための権利としての労働を奪うことはできないし、不当の労役を強制することもできない。人間はすべて権力によるあらゆる圧力、強制から自由であり、平等の権利を有する。安息日はまさに神による自由と平等の主張のシンボルである。われわれは今日絶えざる忙殺と動乱の中にあって、週に一度の完全な休息を必要としていることは誰も疑うことはできない。毎日の仕事は生きるために与えられたベール¹¹であるが、しかし、人間は仕事の奴隷となってはならない。今日われわれの人生は社会的にも経済的にも生き残るための戦場と化し、安息日を守ることもさえ困難な状況にある。であればこそ安息日はそのような日常の戦いに停戦を命じられた日であるといわねばならない。近年になって、そのような思想とは異にしているが、官公庁も学校も企業も週休2日制をとるようになったことは大変喜ばしい傾向である。そのことにおいて、何らかの問題点を指摘する声も無いわけではないが、企業戦争、受験戦争などからの解放としての安息日の意義は大きい。

また解放は救いを意味する。ユダヤ教では安息日は「施し」の日とされている。この日に捧げられた金銭は、同胞の貧しい人々、困窮者を

助けるために用いられる。初代教会においても、主の日の同胞を助けるために募金をした（1コリント1:1）。

イエスが安息日論争の中でホセアの言葉を引用していわれたように（マタイ12:7）、この日こそ、儀式よりも「隣人への憐れみ」を実行すべき日なのである。礼拝において神の言葉を学んだ者はそれを実行しなければならない。それが安息日の精神なのである。

第三に、安息日は強制されて、律法的に守られるものでなく、心からの喜びを以て守られるべきである。シナゴグでは、イザヤ書58:13から由来するプログラムが安息日礼拝のあとに行われる。キリスト教は交わりの宗教といわれる。共同の交わりにおいて、互いの喜びを共に喜び、苦しみを共に苦しむことこそ安息日の精神でなくてはならない。

キリスト教徒にとって、日曜安息日は、主にある救いの喜びを新たにする日であり、主によって約束された永遠の生命を想起する幸福と平安の日である。

ユダヤ教では、安息日は聖書（トーラー）を学ぶ日であり、聖書の学習を人生最高のレジャーと考えたが、同時にそうしたトーラーの学習の楽しみをすべての異教の人々に提供した。彼らに真の神の存在とその教えを伝えること（伝道）を民族の使命とした。キリスト教会がユダヤ教のシナゴグからうけついだ最大の遺産はこの伝道精神であるといつてよい。今日全世界に2億数千万人の信徒を有すると称せられるイスラム教もまたその伝道をユダヤ教より伝承しているのである。

この世界宣教の精神は、すでにソロモンの神殿献堂の祈りに表れている（1列王8:41-43）。

結び

安息日の規定は、捕囚時代以後、その日にすべてのわざを禁止するという側面が、前面にでて強調された。神が創造主であることの宣布も、創造主であることのリアリティが後退して、いわば人倫的な規定として、厳密になった（ネヘミヤ13:19-22）。終には、安息日にあたっては、

外敵の攻撃にさらされても、禁令を守ることをした（第一マカベヤ2:29-38）。ポンペイウス指揮のローマ軍によるエルサレム攻略にあたってイスラエルの民は、安息日に座して攻撃に身をさらしたとヨセフスは伝える（ユダヤ古代史14・4・2）。イスラエルでは、いかなる状況が招来しようとも、これを守らねばならない。禁令の前では、誰もが沈黙しなくてはならなかった。

しかし、新約聖書の時代、現実的には、「安息日の遵守は容易ではなかった…。疑いもなく論争の中心となった異邦人キリスト者にとって、安息日を守ることは無理であった」（モール『新約聖書の成立』日本キリスト教団出版局、73頁）。

イエスの時代とそれに続く時代、ファリサイ人と呼ばれる人々は、ヨハネ・ヒルカノス王の時（紀元34-104年）、イスラエルの伝統に忠実なものとして「学者」や「知者」として尊敬され、有力な集团的勢力として活躍していた。そのファリサイ人が、安息日の収穫を禁じた。種を蒔くことも許されることではない。火をたきつけることも、旅に出ることも禁じた（使徒言行録1:22, マタイ24:20-29）。それら準備をする行為をも禁じた（マルコ15:42）。荷物を持ち上げたり、運んだりすることも禁じた。イエスの時代、安息日は、なにもしてはならない日であり、ファリサイ人はこれを指導し、守らぬ人がいればこれを断罪した。

イエスは、安息日のこのような理解、そして、それを指導する態度は、神の意志に悖ることを宣べるのである。「安息日、それは神が主である」ことを告知する。イエスは、安息日に行動する。しかも、その行動は、安息日において行動することの許容範囲の中でのことではない。マルコ福音書は告げる、それは「片手の萎えた人」（3章）、ルカによる福音書は「腰の曲がった婦人」（13章）である。この人々であれば、安息日が終了するまで、治療を延期しても、その生命に別状はないであろう。しかし、いやそれだからこそイエスは安息日に行動する。イエスは語る「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある。」（マルコ2:27-28）と。

したがって、人間は安息日の主である神の祝福を一方的に受けるのみである。これこそ、真の生命であり、そこでこそ、生命と希望を確信することができるのである。

しかし、安息日に行動したイエスは、まもなく十字架にかけられた(マタイ27章)。人々はやがてイエスを葬る準備をはじめたが、安息日が始まる日没となった。なにもしてはならない安息日には、イエスを葬るための手当てさえしてはならない。人々は、長い一日を、息を殺してすごしていた。安息日終了の夜明けを待ちかねて、三日目になろうとする早朝、女たちが墓へと急いだ。しかし、イエスはそこにいなかった。安息日に、神は行動したのである。エリコへの道の途上でイエスは生きておられる。そこでイエスは出会った人々に「安かれ」と生命の祝福をなされた。イエスは、さまざまな役割と、さまざまな課題を担って苦勞する者たちに、「恐れることはない」「安かれ」と励まし、慰め、導き助けられる。安息日にも、神は行動し、安息日にも主であることを決して止めない。それは、ご自身のためではなく、われわれのために。

やがて、キリストを呼び求める者たち、すなわちキリスト教徒たちは、ファリサイ人の安息日の翌日、イエスの復活の日を心に強くとめた。その日にこそ、神の祝福を受けつぐ忘れることのできない日であることとした。「もはや安息日のために生きるのではなく、主の日のために生きるのだ」(イグナティウス・マグネシア人への手紙9章1節、紀元後110年頃)。

さて、この主の復活の日を、今日日曜日としている。明治政府はその初期、いわゆる西洋暦を導入して週日を確定した。日曜日を休日としたのである。都市における勤労者はこれを休日とし、都市におけるキリスト教徒は、教会における主日礼拝に出席することに大きな矛盾はなかった。明治初期以来、日本のミッション・スクールでは、日曜日は主日として教会の礼拝に出席することを当然のこととしていた。しかし、キリスト教徒にとって、当然のことではあっても当時の日本社会の習俗、制度としては、必ずしもそうではない。

明治初期、前後、日本において、ミッションリイたち、またその協力者たちは、濃淡はあっても、信仰理解の中心にあったのはピューリタニズムの伝統である。そもそもピューリタニズムはイングランドに16世紀中葉から顕わな活動になって、やがてニュー・イングランド開拓を推進していった。そのような精神的な大きな潮流が、太平洋をへだてた日本にまで到達したのである。彼らは、開拓の手を途中で休めるわけにはいかない土地にあった。しかし、主の日は、礼拝のために確保した。それが生命であり、生命の祝福を受けることがなによりも必要であったからである。まさしく、「ひとはパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉で生きる」(マタイ4:4)からである。そして、これは彼らが歴史に確立した信仰的な信念であったからである。大木英夫氏はこれを次のように述べている。

ピューリタン・サバタリアニズム(聖日厳守主義)の中心問題は、「安息日」土曜日(ユダヤ教)か、日曜日(キリスト教)かという議論ではない。その真実の中心問題は、中世以来の伝統的な宗教的祭日を廃して、日曜日だけを聖日としたカレンダーは、人間の生の基礎構造としての時間の現実的な枠をなしている。カレンダーは、人間生活のきわめて深い層における規定である。日本の社会において仏教とか友引とかいう日の規定が、このように外面的には近代化された社会においてなお強い束縛力をもっており、しかもその束縛力は大学教育を受けた者や自然科学者にまで隠然と残っていることを考えるなら、カレンダーの改革がいかに深い克服を意味するかが分かるだろう。カレンダーの改革とは、エートスの変革と結びついているのである。単に経済的利益・不利益の問題ではない。…改革がドグマのレベルから生のレベルにはいる時には特別な精神の力や決意が必要なのである。…このような問題に直面した時、人々はそこに「良心の問題」を感じるのである(『ピューリタニズムの倫理思想』, 新教出版社, 1966年, 245頁)。

さて、キリスト教における職業の理解という問題を考えようとする時、忘れることのできな

い書物にマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』がある。ウェーバーは近代の職業観が宗教改革と深くかわっていることを認めて、次のように論じている。

労働はギリシャ以来下層のものがなす業とかがえられて来たのに対して、ルターはそこに神の召しがあることを指摘して、新しい視点を開いたのである。職業を意味するドイツ語の Beruf にも、英語の Calling にも共に、神から授けられた使命という意味がある。中世の修道院生活に用いられた Vocatio を、ルターは世俗の職業も神の召命による天職と考えてそれを Vocation と理解し、職業労働を通じて神に仕え、禁欲の生活を守ることを勧めたのである。

かくして、プロテスタンティズムは、世俗内禁欲主義を唱え、社会の生産力を高めることに貢献し、資本主義を支持し、形成してきたのである。しかし、今日では、かかる職業観・労働観では通用しない社会経済的事情が発生しており、また資本主義社会の矛盾がいたるところで顕わにされつつある。

しかし、ルターのいう「職業を神からの召命」と考えることによって、すべての職業は上下関係のない平等という労働に意味を見出す時、人間はたとえ厳しい労働であっても、働くことに喜びを感じる。自己の労働が社会に役立っているかどうか、他者との間に対話が成立し、人間関係が開かれるかどうかという問いの前に、職業は隣人愛の具体的な場所として把握しうるのである。人と仕事と物を大切にするという根本的姿勢が保たれる時、その労働は祝福を受け、喜びを感じるであろう。

巨大な社会の動きの渦の中で、主にあって生きるキリスト者の日常の歩み、その働きはキリストの福音によって支えられ、導かれるものであり、われわれは職業を通して証しの業に励むことが神から求められている。

伝道者パウロも、ギリシャ文化によって栄える町、コリントで伝道する者としての役割を果たそうとし、その課題を担いつづけようとしていた。予断と憶測、誤解と偏見の前で、なんと

かして福音の伝道者として生きようとしていた。だから、彼でさえも、「自分にもどって」「わたしは土の器だ」と自認した。その土の器は、しかし、神の測り知れない力を持つものである。パウロはいう。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。」(IIコリント 4:8-11)

このようにして、われわれも、神の前に立ち、神の祝福を受ける必要がある。それは、復活のキリストの命にあずかることにより、自律的な自由の主体として整えられて、この世における役割と課題へとあらたな志を抱いて、立ちむかうことへと派遣されなければならないからである。神の祝福を受けて、静から動へとリズムカルに波動する、さらにわれわれの生そのものが、その誕生から完成へと向かう一つの大きな波動となってゆくことが求められよう。そこで日曜日、主日毎に、その生活過程を整えてゆくことは、われわれキリスト者のみならず、すべての人びとにとっても、平安にして、動的な日々を迎えるために、さらには主の再臨の日に備えるためにも、静にして聖なる一日として第一義的に重要なことは言うまでもない。主イエスは、「山上の説教」で次のように勧めている。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ 6:33)。すなわち、時間を聖化することによってのみわれわれは時間の問題を解決することができるのである。¹²また、ハイデルベルク信仰問答(1563年)第103問では、「日曜日は“この世の生涯において、永遠の安息日をはじめることであります”」と述べられている。

主日の清らかで静かな時間は、永遠の平安の国へ、永遠性の真義への覚醒の萌芽へとわれわれを導いてくれる¹³。ここに初代教会が、安息日に代わる「主の日」を律法にはしなかった真意があるように思われるのである。

注

- 1 一般には、捕囚時代からギリシア・ローマ時代を通してパレスチナ以外の地域に広く移り住んでいるユダヤ人、「ディアスポラ」(*διασπορά*)とは「散らされている者」の意である。
- 2 広義にはユダヤ教の教えの一切。一般的には、旧約聖書のモーセ五書を指す。
- 3 すなわち、テフィリンは通常左腕と額につけられるが、それは申命記6章8節にしたがって、「しるし」として着用されるものである。安息日すなわちシャバットは出エジプト記31:17にしたがって「しるし」なので、安息日にはテフィリンは着用の必要がないとされているのである。つまりテフィリンは週日の祈禱の際にのみ着用される。
- 4 6世紀の初め、バビロニアで編纂された36巻からなるタルムード。タルムードとは、ユダヤ教口伝律法の総称。本文ミシュナーと注解ゲマラーから成り、生活・宗教・道徳に関する律法の集大成。ミシュナーとは2世紀末にラビ・ユダ・ハナシーがそれまで伝承されてきた口伝律法集から宗教生活に関するものを6編に編纂した教典。後にタルムードの基となる。
- 5 4世紀頃、ティベリアで編纂されたタルムード
- 6 これがいわゆる「セプトゥアギンタ」=「七十人訳聖書」(略号 LXX) である。セプトゥアギンタ *Septuāgintā* というのはラテン語で「七十」の意味の数詞で、それは、「イスラエルの十二部族」各々から六名ずつ計七十二名の長老たちが、彼らによって旧約聖書の全体がギリシア語の翻訳事業がなし遂げられた、とされていることによるが、この「七十二」という数がいつの間にか「七十」というきりのいい数に変えられた、と一般に説明されている。
LXX 成立の背景ないし理由としては、ギリシア語世界の中に住んで何世代かを経るうちに、旧約聖書をヘブル語(一部アラム語)原典で読むことのできない世代が増えてきたという、ユダヤ人共同体内部の事情が挙げられる。
- 7 すなわち、シェモネ・エスレーはシエマと共に、イエス時代の個人用、礼拝用の最も重要な祈禱文であった。この祈りの成立の時代は明確でないが、或る部分は紀元後1世紀前半に存在し、全体は1世紀末までに完成し、12の異端者の祈りを追加して完了したということについては、学説が大体一致する。
- 8 前6世紀にギリシャに起こって、1, 2世紀に広

く流行した医神

- 9 Nisan (暦) バビロニア系の月の名で、カナン系のアビブ、ユダヤ暦の正月であり、太陽暦の3-4月に当たる(ネヘ2:1, エス3:7)。
- 10 正式の名前は「12使徒の教え」。紀元100年頃に書かれたキリスト教会の礼拝形式文書
- 11 ルターは職業を *Beruf* として捕らえ、そこに神の召命を見たのであった。元来、神の召命 *vocation* は中世では修道院生活にのみ妥当することであり、世俗的職業生活にはあてはまらなかったのであるが、ルターは修道生活を廃止し、世俗の職業を神の召命による天職と考え、職業労働を通じて神に仕える生活、禁欲の生活が成立するとしたのであった。このような考え方は、ルターからカルヴァンを経て、ピューリタニズムを含む、いわゆる禁欲的プロテスタンティズムにおいて徹底した。
- 12 ヘッセル『シャバットー安息日の現代的意味』、教文館、2002年、139頁
- 13 前掲書140頁

参考文献

- 1 土岐健治『初期ユダヤ教と聖書』日本基督教団出版局 1994・3・30
- 2 ラビ・ピンハス・ペリー『トーラーの知恵』ミルトス 1988・6・6
- 3 石田友雄 木田献一 左近淑 西村俊昭 野本真也『総説 旧約聖書』日本基督教団出版局 1984・5・25
- 4 長窪専三 土戸清 関根正雄 川島貞雄訳『総説 ユダヤ人の歴史 下』新地書房1989・9・15
- 5 関谷定夫『聖書のあけぼの一考古学的アプローチ』中川書店1990・11・10
- 6 関谷定夫『安息日—その聖書的今日的意義—』西南学院大学神学論集第51巻第1号1993・9
- 7 蛭沼寿雄 秀村欣二 新見宏 荒井献 加納政弘『原典新約時代史—ギリシャ・ローマ・ユダヤ・エジプトの資料による—』山本書店1978・10・25
- 8 ヴァルター・リュティ 穴戸達訳『あなたの日曜日』新教出版社2002・3・15
- 9 A・J・ヘッセル 森泉弘次訳『シャバット—安息日の現代的意味』教文館2002・4・10
- 10 船本弘毅『キリスト教と現代』日本基督教団出版局1990・2・15
- 11 『新訳聖書神学事典』東京神学大学新約聖書神学事典編集委員会編 教文館1991・8・20